

1990年代から、小艇の事故が目立つようになる。また初歩的なウオーターマンシップ(乗艇者としての操艇技術)の問題も懸念されるケースが見られるようになった。

**34 田名部高校/1990.7.19/1名/大湊湾**

5:40, 男子1×がリギングの試漕に出艇。艇庫前40mでクラッチが外れ沈し、そのまま水没(泳げなかった)。陸上から4名が救助に向かい泳ぐが間に合わず。2時間半後に発見。クラッチに故障はなく、ピンの固定不良が原因の様様。

**35 福岡大学医学部/1991.4.29/2名/遠賀川**

前日の大会の撤収作業で、午後2時頃ナックルフォア6名で乗艇中、高波で浸水、沈。パニックになり離艇、岸に向かって泳ぐ途中、あまり泳げない2名が水没、夕刻に遺体で発見。事故直後の2:20には強風波浪注意報が出た。救命具なし。

**36 八代南高校/1991.7.9/1名/球磨川**

1年生シングルスカルが球磨川に出艇、10分後に沈。岸で見ていた1名が泳いで救助に向い、艇を復帰させ自分が乗艇、艇につかまっていた1年生を「岸に向かって泳がせる」。20m程で動きが止まり水没。午後7時過ぎに遺体で発見。

**37 日本大/1992.8.2/1名/隅田川**

隅田川レガッタの優勝後、慣習的に舵手を川に投げ込んだところ、行方不明。

**38 彦根東高校/1994.4.13/1名/琵琶湖**

ナックルフォア、シングルスカル、ダブルスカルが出艇、2艇は途中引き返したが、ダブルスカルだけが湖へ出て、波のため沈。泳いで引き返した。その後、ナックルフォアに新入生4名を乗せ体験入部の試漕(8名が乗艇、定員過剰)、湖上に出る。当時は強風注意報発令中であった。浸水して沈。7名が艇を離れ3年生1名が途中で溺水。1時間後に収容したが死亡。

**39 津久井高校/1995.5.3/1名/瀬田川**

朝日レガッタの練習中、3年生女子ダブルスカルが下流に練習、洗堰上流約100mでおそらく折り返し中に警告看板に接触し沈。堰を越えて流される。1名は救助されたが、1名溺水。洗堰は全開で放流中、流れが速かった。

**40 津幡高校(石川)/1995.8.6/1名/錦海(米子市)**

高校総体で、男子2×の3年生が準々決勝直後、呼吸が荒くなり座り込んだまま動けなくなる。応急手当をし、安静後一度回復し宿舎に戻ったが、容態が急変した。救急車で病院に運ばれたが既に死亡していた。(心臓に持病があった)

**41 福岡教育大/1996.2.9/2名/遠賀川**

悪天候、低水温下、1年生がシングルスカル練習中に沈。3年生が救命具(浮き輪)をつけて救助に泳ぎ、しばらく艇につかまっていたが、約30分後には2人とも姿が見えなくなる。(低体温症～溺水。持っていられなくなった可能性)最初の沈からかなり時間が経っており、救助体制、要請等の遅れが問題。

**42 同志社大/1997.8.8/1名/瀬田川**

数日間の雨で増水、洗堰全開放流時のつきフォアで早朝出艇(1年生漕手に4年生舵手)。唐橋上流でターンしたとき、エイトが接近、通過のため待機している間に流されて橋脚に激突。2日後に遺体で発見。

**43 香川大/2001.1.9/1名/府中湖**

男子シングルスカル2艇で出艇、1×経験5～10回の1年生が転覆し艇につかまるが、栓がなく浸水、沈下のため放棄、2年生の艇にしがみつく。(一度岸につけたが、再び艇につかまる形で艇庫をめざしたとの情報もある)。しかしこの艇も浸水し(?), 体力を消耗していた1年生は意識朦朧となり艇から離れ沈没。2日後発見。

**44 網走南ヶ丘高/2001.9.21/1名/茨戸湖**

茨戸での全道高校新人大会開催中、レースに向かって女子2×が突風を受けて転覆し投げ出された。艇と1名は岸に吹き寄せられたが、1名(15歳)が水没し、翌日発見された。

裁判では、遺族が、教諭2名と大会運営担当教諭1名が、安全配慮義務を怠った(①天候悪化・強風に適切な指示をしなかった、②転覆に気付かず適切な救助ができなかった、③救命具着用させなかった)として、道に損害賠償請求、道側は「予測不可能な猛烈な突風による事故で過失はない」と反論。2005年、札幌地裁は、遺族の訴えをほぼ認め、「危険性を知らせ、監視義務を尽くせば、強風に適切に対処でき、事故発生を防げた」と引率教諭の過失を認め、道に約3460万円の支払いを命じた。大会運営担当教諭については、「教諭の職務に含まれず、道に賠償責任はない」と請求を退けた。

[小沢の個人的見解] 突風の予測可否が一つの焦点で、ダウンバーストの可能性もあり、想定外との印象も受けるが、半面、当時(全国天気図には記載されていないが)寒冷前線の通過も予想され強風注意報も出ていた。大会運営の中で強風に対してどうリスクを見、安全対策を施したか、レース中断、水域状況把握、救助体制など、運営をみなおすべき事例と思われる。

**45 パルテ会/2005.8.28/1名/戸田**

本項はパルテ会ウェブサイト掲載資料をもとに編集  
Iさん(51)は、昭和53年一橋大卒。2004年夏にパルテ会に入会、05年には4+やKFを漕ぎ、好成績を挙げていた。その日、Iさんは企業レガッタに向け午後1時から約1時間KFに乗艇(出艇時、腰をひねり軽いメニューで1周半)。そして約1時間半の休憩の後、3時半からパルテ会の定期練習に参加した。ランニングなどの後、エイトで出艇。穏やかな南風で最高気温は25℃。Iさんから「腰が心配なので軽く」と要請があり、分漕でのアップ後、折り返してからライト22-27で片道ロングのライトパドル。1周目の後、舵手がさんらに体調を尋ね「大丈夫」との返答。2周目は短い分漕の後、ライトパドルのロング。折り返し1500mまでライトパドルを続けたところで突然、Iさんが意識を失いオールを放し、後ろに倒れた。急いで着岸し、伊藤さんを下ろし、近くにいた大学の女子マネージャに頼み携帯から119番通報。救急車で病院搬送されたが、助からなかった。